

定本
織田作之助全集

第五卷

文泉堂書店

定本 織田作之助全集 第五卷

〈日本文学全集・選集叢刊第6次〉

昭和五十一年四月二十五日発行

著 者 織 田 作 之 助

発 行 者 谷 地 秀 祐

印刷所(株)平河工業社

製本所(財)印刷局朝陽会

発行所文 泉 堂 書 店

本店 東京都千代田区神田神保町二一四一六

電話 東京(03)二六五局八九八二番(代表)

出版部 東京都千代田区神田神保町一四九一

電話 東京(03)二六五局八九八三番
二九四局〇二五九番

(落丁・乱丁本はお取替いたします)

定本 織田作之助全集

第五卷

目次

道なき道……………一〇一

訪問客……………一一三

髪……………一二七

予言者……………一三七

見世物……………一四五

表彰……………一五五

注射……………一六七

十五夜物語……………一七三

蚊帳……………一九五

女の橋……………二〇一

船場の娘……………二一三

大阪の女……………二二五

奇妙な手記……………二三九

妖婦……………二四九

六白金星……………二五九

昨日・今日・明日……………二七九

アド・バルーン……………二九五

神経……………三二一

世相……………三三七

解説……………小田 実……………三六六

作品解題……………青山光二……………三七二

定本 織田作之助全集 第五卷

社

楽

—

よせば良いのに、大坂^は骨屋町の徳助、松助という二人の下戸が、炭屋町にかくれもない上戸男の三平というのを、江戸見物に誘うた。

これが間違いのもとである。

三平はつねづね頓作滑稽をたくらむのに妙を得て、社楽の三平と緯名された町人の人気者だったが、酒ゆえに女房の来手がなかった。もともと三平に言わせると、酒というものは清いものだが、女は自身体がらわしいもので、とてもものに聚る気はないと変骨を氣取って言うのである。ともかく独り者である。それだけに話の纏まりも早かった。

徳助、松助はいずれも律義者で女房持ち。しゃらくさい女房持ちでさえ女房を残して行くというのに、独り者の身軽なおれが南蛮の国へ行けとなら知らず、たかが江戸見物を億劫がる法はなからう、それにおれが加わらねば、むつつりの芸なし下戸二人の道中はさぞ火が消えて淋しかろうと、早速誘いに応じたのである。

案の定、道中は賑うた。

ただひとつ心配なのは三平の酒癖だったが、これも路銀乏しい故の自重か、存外盞を手にしたがらず、同行の驥尾

に附して、茶店茶店の大福餅でお茶をにごすなど、不思議なくらい神妙極まった。

が、京、大津、草津、四日市を過ぎて、はや桑名の泊りには、さすがにお茶漬で済まなかった。

三平が風呂の中で歌った小唄を、飯盛に、さきほどの美しいお声はこちらさんではと、褒められたのが切っ掛けで、

「なに、褒められるほどの声ではない。もともと、これであらうでもはいって居れば話は別だが……。——そうだな、いつまで下戸のつきあいでもなからう、なに構うもんか、一本——」

附けて貰おうということになった。

「こちらさん達は……」

「いや、わしらはいつそぼた餅を所望じゃ。夜食にでもしましうかい」

早寝した徳助、松助が夜中にふと眼を覚ますと、三平は飯盛を相手になお飲んでいゝる。

余程廻っているのか、歌うやら、呶鳴るやらで、眠れた騒ぎではなかったから、徳助が、「三平、ええ加減にせんかい。そのざまはなんじゃ。大方宿の樽をすっかり空けてしまったろう。当節一本の銚子が幾何^{いづ}しているか知っているか。眼を向くほどとられるぞ」

と、言うのと、松助も枕元のぼた餅を頬張った口を合せて、「すこしは慎まぬと、嫁の来手がないぞ。いや、わしひと

りが言うのじゃない。長願寺の和尚も、それから……」

「くりから峠の合戦と来たね。あはは……」

三平は素面でも地口、洒落を言わぬと気の済まぬ男である。

「——ひとの棚おろしをするのに、ぼた餅を頬張りながらする奴があるか。ぼた餅ははなから棚に上げてあるもんじゃ。そもそもそのぼた餅というものはだね、承久元年以来子供^{ゴロ}の食うものと決まったものじゃ。でなければ、はしたない下種^{ゲラ}の女の食うものじゃ。女子供の食うものを、大の男がむしゃむしゃと寢床の中で食うという法があるものか。男というものは、甘いものを見ても、がつがつ手をだしたがるぬものじゃ。この節ちと恥しいと思え」

すると、松助は口をとがらせて、

「そう言うが、わしの女房は……」

餅屋の娘だった。

「言うな、言うな、男というものは、いかなる場合に立ち到っても、女房なぞというけがらわしい言葉を口に出さぬものじゃ。はや女房を思いだすとは、みつともないぞ、松助……」

三平もまた酒を飲むと、説教口調になるという癖から免れていなかったらしい。

「——察するところお前は、さだめしぼた餅が取りもちの縁をうけてみたかったのじゃろ？　むさい、むさい！　大方齒切れの悪い恋を囁いたことじゃろう。げに女という

ものはぼた餅じゃ。べちゃくちやと気色が悪い。うわべは白い粉を吹いておっても、皮を剥げば、へその穴みたいじゃ。真つ黒じゃ。不潔じゃ、けがらわしいものじゃ。それに比べると、酒というものはなんと清いものではござらぬか、のう飯盛」

「ほんに、左様でござりまするな」

うち見たところ、飯盛ははしたない女である。

「なにが左様じゃ。べんちやらをするな。べんちやらを。おれはひとからべんちやらを言われることは好きだが、酒を飲んでる時は、べんちやらをされたいほど心根は卑しくない。なにが左様じゃ。そう言うお前もこう見たところ、どうやら男にも見えない。けがらわしい。下れ、下れ、——おっと、下った序でにお鮎子、それから小鉢物……」

運ばれて来たのを見て、

「——これはなんだ？　こういう名もなき魚をお前とこでは客に出すのか」

「あら、名もなきだなんて、名はありますわ。蛸ですわ」

「ちいさい蛸だ。これで一人前分取るのか」

「あら、ちいさいだなんて、飯蛸ですわ」

「なるほど、そう言えば、飯蛸に見えぬこともない。しかし、これが一人前の蛸か。なんとやら裾の枯れた蛸じゃな。——おい、見ろ！　足が六本しかない。亭主を呼べ、亭主を……」

下戸の早起きで、徳助、松助は夜明け前に起きて出立の用意をし、宿の者をあぶつかせた。

ところが、三平は到頭飯盛の酌で盛りつぶされてしまい、したたか熟睡して、いくら揺り動かしても、こよりをういてみても、あらぬ寢言を口走るだけで、一向に眼を覚す気配がない。

昨夜のことをいくらか根に持っていた松助は、すっかり業を煮やして、

「呆れ果てた奴じゃ。こういう酒飲みはいっそ懲らしめのために……」

徳助の耳になにやら囁いた。

「うむ、こりゃ面白い。ところで剃刀は……」

「ある。女房が行李の中へ入れて置いてくれた」

大分経って、やっと眼を覚した三平は、大きな欠伸といっしょに伸ばした手で、ぼりぼり額を掻いたとたん、ふと頭の附近の空気が何やら軽いのに気がついた。

驚いて頭に手をやると、いつの間に剃られたのか、つるつるの丸坊主である。一本の毛も残っていない。

「こりゃ、なんちゅうことじゃ。やい、徳助、松助、お主らの仕業だな」

「さいな。わしらは一向に知らぬが……。大方、酒毒で毛が抜けたのじゃろう」

兩人は渋い顔であった。

三平は肝をつぶして腑抜けてしまった。

飯盛が出立ちの朝食を運んで来ると、三平はいきなり頬かむりした。けがらわしいものの前でも、恥しいということは知っているわいと、徳助、松助は蛤の佃煮がたまらぬほど美味かった。

往還へ出ると、三平は、

「こんな頭では江戸見物しても面白くない。箱根の関所も坊主は通さんそうな。わしは帰る」

そう言って、七里ノ渡しを渡ろうとせず、ぶりぶりしながら四日市の方へ引きかえして行き、呼ばれても振り向くとはしなかった。

それから六日目の午下り、骨屋町の松助の留守宅へのそりと顔を出した出家姿の男がある。

顔を見るなり、松助の女房は吹きだすより前に、どきんと胸さわぎして、

「社業の三平さんじゃないの。いったい今時分、その恰好で……」

気でも狂ったとか。いやそれとも何かあったのではなからうかと訊くと、三平ははやはらはらと落涙して、

「いや、推量してくれ。伊達や酔狂のこの服装じゃない。実は、四日市の七里ノ渡しで、船がてんぶくして三人とも波にさらわれ、浮きつ沈みつ流れてえらい災難じゃ。倅い

わしは運良く杭にしがみついたところを、助け船に引きあげられて、危なく命は助かったが、ほかの二人は到頭土左

衛門になってしまふた、と聞いたときのこのわしの驚き、悲しみ。いや、二人だけじゃない。ほかの乗合の者もたれ一人として助かった者はなかった。いや、もうなんというしやらくさい浮世じゃと、わしは無常を感じ、到頭出家を志しましたわい。あれから直ぐ廻国と思ったが、まずはこのことをおまはん達に知らせてあげようと思い、こうして帰つて来たわけじゃ」

南無阿弥陀仏と、汚い教珠を揉みながら言うのである。

松助の女房は仰天してしまった。

三平はその足で、徳助の留守宅へ顔を出し、同様徳助の女房を仰天させた。そうして、行方をくらましてしまった。

松助の女房は亭主想いであつた。すぐその場で後を追おうと一旦は覚悟したが、さすがに思い止り、しかし、亭主に先立たれて何の浮世にたのしみがあろうと、頭を剃って亭主の菩提をとむらう新尼となつた。

それを見ては、徳助の女房も長い髪の毛をつけて居るわけにはいかず、同じく頭を剃り、瞬く間に新尼が二人出来たわけである。

近所の人人はいずれも皆感心して、

「女というものはこうでなくてはかなわぬものじゃ。今どきの女たちは、亭主の葬礼を見送るにも、紅白粉つけてとんと見苦しいものじゃが、いや、殊勝、殊勝」と、言い合つて、

「これも日頃から仏たちの心掛けが良かったからじゃ」

故人の徳を尾鰭つけてはめそやしているところへ、徳助松助の二人が無事江戸見物を済まして、

「いやもう、江戸などというところは、侍が威張りくさるばかりで、面白くもないところじゃ。永い旅して損を見た」

などと語り合いながら、帰つて来た。

いずれも女房に甘いところを見せて、米半俵もするほどの櫛を土産に買つて来たなど、まるで茶番である。

どこへその贅沢な櫛をさせというのか、帰つてみると、女房たちの頭は綺麗なつるつる坊主である。

「誰に断つて、その頭を剃つた？ いや、なんの不足があつて、亭主のわしのどことが気にいらなくて、尼になつた」

叱りつけると、女房は相手の顔をじろじろ観察しながらまず黙つて鹽に水を汲んで差し出し、しきりに足のことを気にするなど、こころあたり暫らくとんちんかんが続く。

やがて、幽霊でもないことが納得できて、だんだん詮議した挙句、三平に謀られたことが判つた。

「すまじきものは悪戯じゃ」

と、松助が後悔すると、

「いや、用もない旅などに出掛けたのが、そもその間違いのものとじゃ」

と、徳助が言い、お互い女房の頭を見て、笑う精もなかつた。